

やま

やられたら やりかえせ

監督

佐藤満夫
山岡強一

ドキュメンタリー・フィルム / 16ミリカラー / 110分 / 1985年作品



自称「日雇完全解放戦士」川口五郎。
ぼくらはみんな彼のことを
ジョーと呼んでいた。

plan-B

「山谷 やられたらやりかえせ」特別上映会
—ジョーの詩を読む「あさってのジョーたちへ」

2018年1月13日(土)

開場 15:30 / 「山谷」上映 16:00 ~ / —ジョーの詩を読む「あさってのジョーたちへ」 18:00 ~

詩を読む ● 水野慶子 / 大谷蛮天門
お話し ● 元釜共闘 (暴力手配師追放釜ヶ崎共闘会議) メンバーから / 寿日労 (寿日雇労働者組合) メンバーから
演奏 など

料金 1500円 予約・問い合わせ: 「山谷」制作上映委員会
044-422-8079 (小見)、090-3530-6113 (小見)

<http://www.sanyafilm.jp.org/>

plan-B

TEL03-3384-2051

中野区弥生町4-26-20-B1
(入口は中野通り沿い)

地下鉄・丸ノ内線
中野富士見町 5分

plan-B
地下1階

ジョナサン

富士高前

富士高校

モスバーガー

中野通り
至中野

丸ノ内線
中野富士見町駅

コンビニ

今回の企画は従来の定期上映会とは異なり、
映画を観ない場合でも入場料が必要となります。

やられたらせ やりかえせ 山谷

この映画は一九八四年十二月22日、天皇主義右翼・日本国粋会金町一家西戸組組員の兇刃によって虐殺された佐藤満夫監督の遺志をひき継ぎ、その後結成された「山谷」制作上映委員会を中心とした多くの仲間たちが協力し完成させたものである。

しかし、映画完成直後の八六年一月13日、佐藤のあとを受け、実質的な監督として現場をリードした山岡強一が同じく金町一家の放つテロリストによって狙撃・射殺されるという事態にたち至った。私たちは、この二つの「死」に「この時



佐藤満夫



山岡強一



代の暗黒」を見ざるを得ない。山岡は、友人に宛てた手紙の中で、この映画の前提として「一九八四年十二月22日佐藤監督虐殺の現実、②それは山

谷の現在、③同時に今日の時代状況、④しかも、労働者支配から労働者支配への開始、⑤この搾取と支配の二重構造の中に加速化される差別の現実、⑥それを統合し統治するものとしての天皇制、⑦天皇制という日本主義と資本

自体の運動法則からする越境の亀裂は侵略戦争を必然化、⑧しかも、この支配権力の本質は、朝鮮、台湾に対する植民地支配とアジアに対する侵略戦争の延長、⑨従って、労働者支配と強制連行は天皇制と侵略戦争動員を撃つものとして捉え返さねばならない」と書き記している。

山岡（寄せ場）の現実を映画に写し撮ろうとすることは、まさにこのようなことを透し見ることにほかならない。

この映画には実に様々な問題が詰め込まれている。路上手配と暴力支配被差別部落問題、在日朝鮮人問題、先行的保安処分、地域排外主義、下層差別、そして台頭するファシズムの芽……。し

かもそれらは別々に存在するのではなく、寄せ場に集中的にあらわれるこの国の差別・支配構造そのものでもあるのだ。映画に写し出されるひとつひとつの事柄は、寄せ場に固有の問題ではなく、私たちが生きているこの社会の隠された実相であり、日本近代化一〇〇年の実体である。

カメラは佐藤監督の「死」と、それに続く反撃の暴動に突き動かされ、寄せ場労働者の一日と一年を追い、更に、現在の寄せ場の原点ともいうべき地点にまで降りたついでだった。

しかしこの映画は、そうした「重い」テーマを背負いながらも、決して沈んだ表情は見せない。そうすることは、この地に住み、生活している者たちの流儀ではないからだ。社会から隔絶され、どこか遠くにあると思っっている寄せ場は、私たちのすぐ横、すぐ隣りにあることがわかるだろう。それは、絶望の深さを知り抜いた者が、その果てにつかんだギリ

ギリの明るさである。寄せ場はこの社会の「現在」を照らし出すと同時に、時代の「予感」を孕む磁力に満ちた「都市」そのものである。



「山谷 やられたらやりかえせ」特別上映会

—ジョーの詩を読む 「あさってのジョーたちへ」

自称「日雇完全解放戦士」川口五郎。ぼくらはみんな彼のことをジョーと呼んでいた。

川崎でく日雇い>の息子として育ち、釜ヶ崎で「鈴木組闘争」に遭遇。「コーチャン（船本洲治）の一番弟子」と語るとき、少しはかみながらも誇らしげな表情を思い出す。過剰なまでの暴力性を売り物にしつつ、実はシャイで優しい男だった。彼の死から既に一年半以上もたった今、彼がかつて獄中で書いた詩集を再刊し、「追悼会」まで準備しているのは、その魅力のせいでもあるだろう。

「良くも悪くも“寄せ場”の活動家の典型であった（詩集掲載の追悼文より）」ジョーとは、あの時代の“寄せ場”が生んだ活動家だった。そこには幾人もの“ジョーたち”がいたのだ。

“寄せ場”が労働市場としての機能を失くしていき、「仕事に行けたら教えてくれよ」と言って/様々な情報交換をする場所/俺達の社交場 井戸端会議の場所（「寄せ場の朝」）を失いつつある現在。ぼくらはあの、跳ね上がりながら、活き活きと動き回っていた“ジョーたち”と出会う機会をも奪われてしまっている。

「ジョー＝川口五郎 追悼」。ぼくらは彼の生きた時間や場所を、もう一度振り返りかえてみようと思う。まだ見ぬ「あさってのジョーたち」との出会いに備えて。



関連書籍 好評発売中!

- ★ 〈山岡強一遺稿集〉
『山谷 やられたらやりかえせ』
現代企画室 刊 3000円
- ★ 〈サウンドトラックカセットテープ〉
『蠅的態』 (ライナーノート＝平井玄) 1000円
- ★ 〈映画パンフレット〉「山谷」制作上映委員会 編 800円